

Barbara Joe Beckman:
Underlying Word Order
—*German as a VSO*
Language

重 藤 実

1. ドイツ語を記述する際に、基底構造における主語 (S)・動詞 (V)・目的語 (O) の語順はどれが適当か、論争が続いている。生成変形文法によるドイツ語の記述の初期には SOV 説が有力だったが、その後 SVO 説が現れ、それに対する反論もあって最終的な結論は出ていない。

Beckman は初めてドイツ語の基底構造として VSO 説を提案し、今までの論争で使われてきた文はすべて VSO 基底構造に基づけばより簡潔に派生できると主張している。主語・動詞・目的語の3つの要素の語順としては6通りの可能性があるが、これで3通りが提案されたことになる。

2. この本は、副題からもわかるように、McCawley (1970)⁽¹⁾ の英語の分析をドイツ語へ応用したものである。McCawley (1970)⁽²⁾ に対してはその後 Berman (1974) などで反論がなされ、今日ではほとんど受け入れられていない。その主な理由は、VSO 説では認められない VP という構成要素を、英語については認めざるをえないということだろう。

しかしドイツ語についてはやや事情が異なる。ドイツ語では VP を受ける代動詞が方言形を除いては存在しないし、主語 NP と目的語 NP を構造上区別しなければならない必要性もあまり強くはない。そこで Beckman は、VP という構成要素の存在を否定

して VSO 説を主張しているのである。

3. Beckman 説の基礎となっているのは、Lederer (1969)⁽³⁾ で使われている「前域」(prefield) という概念である。前域とは定動詞の直前の場所であり、たとえば (1)-(3) ではイタリックの要素が前域に位置している。これらは (1')-(3') から前域移動 (Prefield-shift) などの変形規則が適用されて生成される。また決定疑問文・命令文などでは、たとえば (4) のように前域に何もなく、基底構造の語順がそのまま表層に現れていると考えられている。

(1) *Wir wollen am Freitag zusammenkommen.*

(1') *wollen wir am Freitag zusammenkommen*

(2) *Ein Hotel wird von der Baufirma Schweiger dort gebaut.*

(2') *bauen wird die Baufirma Schweiger ein Hotel dort*

(3) *Wer fährt morgen mit dem Zug nach Kiel?*

(3') *Q fährt Q-nom. morgen mit dem Zug nach Kiel*

(4) *Fährt sie nach Kiel?*

(4') *Q fährt sie nach Kiel*

この考え方に基づく、主節において定動詞より前に位置するものはすべて前域移動という変形規則で処理できることになる。数少ない変形規則でさまざまな構造を導こうとするのは、たとえば Thiersch (1978)⁽⁴⁾ にも共通の試みであり、文法規則の過剰な生成能力を制限しようという目的にも合っている。Beckman によれば (5)-(8) も (1)-(3) と同じような過程を経て生成される。

(5) *Anne scheint intelligent zu sein.*

(6) *Ich habe gefragt, wen Hans geküsst habe.*

(7) *Auf steigt der Strahl.*

(8) Nach Hause gehen will er noch nicht.

これらの文は、これまでの SOV 説や SVO 説でも説明できないわけではない。Beckman の VSO 説の長所は、これらの文もすべて前域移動という1つの規則のみで処理できると示している点にある。

4. しかしこの本の欠点は、「前域」の構造上の定義と前域移動規則の定式化が欠けていることだろう。SOV 説や SVO 説への批判の際に各文の派生がくわしく図示されているが、その句構造標識にも「前域」という表示は現れない。

この本は生成変形文法の標準理論に基づいていると考えられる。そこでは句構造標識は「に先行する」(precede) 関係と「の1つである」(is a) 関係のみから成り立っている。ところが前域は名詞句のこともあり前置詞句のこともあり、副詞句でもいいらしい。つまり前域とは「の1つである」関係に還元できないさまざまな構成要素の総称なので、図に示すことができなかったのだろう。それならば前域移動規則の定式化も不可能ということになる。Beckman が1つの規則と考えたものも実はたくさんの規則の総称にすぎず、VSO 基底構造からの派生は、SOV や SVO 基底構造からの派生と比べて決して簡潔ではないことになってしまう。

5. 文法理論の目標の1つは、文法的な文はすべて生成し、それ以外は1つも生成しない規則の体系を作り出すことにある。Beckman がこの本で (1)-(4) のみではなく (5)-(8) のような文にまで共通の派生を考えたのは、たとえ前域移動という1つの規則の存在が疑わしいとしても、この目標に沿ったものと言える。

この本はワシントン大学に提出された博士論文に基づいている。本の出版は1980年だが Beckman が博士号を受けたのは1975年

なので、この本は実際には1974年から1975年頃に書かれたものと考えていだろう。

この論文は Chomsky (1965)⁽⁵⁾ に基づく生成変形文法の標準理論に従って書かれている。しかし生成変形文法はその後さらに発展を続け、現在では標準理論とはかなり異なった文法の枠組みが考えられている。Beckman では十分な定義を与えることができなかった「前域」という概念も、現在では \bar{X} 理論を用いれば定義できる可能性がある。この理論では句構造標識の節点の表示は俺ちゅう記号ではなく素性を用いるので、前域に位置することのできる要素に共通する素性を考えることができれば、前域を構造に基づいて定義できることになる。また前域移動規則も、「 α を動かせ」という規則の一部分だと考えることができるかもしれない。

Beckman の VSO 説は、「前域」の定義が不十分なため、そのままでは成立しない。しかし標準理論に基づいては不可能だった「前域」の構造上の定義が理論の発展とともに可能となっているのなら、前域移動規則に基づく Beckman の VSO 説も成立する可能性があるのかもしれない。

6. 最近の文法理論の発展の特徴の1つに、対象領域の区分という方向がある。これは音韻論における有標性理論とも密接な関係がある。

(1)-(6) と (7) (8) の例文を比べると、(1)-(6) の方がドイツ語としてはより基本的な文であり (7) (8) はやや特殊な文であるように思われる。Beckman はこれらをすべて同じ変形規則によって同じような過程を経て生成しようとしている。

(1)-(8) はすべてドイツ語の文としては正しいものなので、ドイツ語文法はこれらを生成しなければならない。しかしたとえすべてをうまく生成できたとしても、(7) (8) がドイツ語としてはやや特殊なものであることが

示されなければ、文法としてはやはり欠陥があるのではないだろうか。つまり (1)-(6) のようなドイツ語にとって無標の文と (7) (8) のような有標の文とは、文法によっても異なる扱いを受けるべきだと思われる。Beckman は1つの文法規則の対象領域を広げることを目的としたのだけれど、対象領域すべてを同じ方法で扱うことが常に正しいとは限らないのである。

(1)-(6) と (7) (8) が有標性に関して異なるなるとすると、基底構造の語順としてまず考慮すべきなのは (1)-(6) の文のみであり、(7) (8) は文体的な規則で扱うことになる。つまり (7) (8) は VSO 説を支える根拠としては弱いのである。

もっとも、有標性理論の欠点は、有標と無標とを区別するはっきりした基準がないことである。ここでドイツ語としては基本的な文に属すると考えた (1)-(6) にしても、(2) の受身文や (4) の決定疑問文はその他の文と比べてやや有標性を持っているかもしれない。VSO 説は決定疑問文や命令文の語順をもとにしてすべての文を派生させようとするのであり、この点も問題があるように思われる。

7. Beckman の本は、やや古い理論によって、過剰な生成能力を持たない簡潔で明示的な文法を書こうとした試みの1つである。不十分な点もあるが、その後の理論の発展によって解決できそうな点もあり、また検討を要する点も多い。この本は、ドイツ語の語順をめぐる問題を扱う場合、注目すべき本ではある。しかしこの複雑な問題は Beckman によって解決されたとは言えず、相変わらず SOV 説がやや有利という状況には変わりがない。まだまだ論争は続きそうである。

注

1. McCawley, James D.: *English as a*

VSO Language, *Language* 46 (1970)

2. Berman, Arlene. On the VSO Hypothesis, *Linguistic Inquiry* 5 (1974)

3. Lederer, Herbert: *Reference Grammar of the German Language*. Based on "Grammatik der deutschen Sprache" by Dora Schulz and Heinz Griesbach, Charles Scribner's Sons (1969)

4. Thiersch, Craig L.: *Topics in German Syntax*, Ph. D. dissertation, MIT. (1978)

5. Chomsky, Noam: *Aspects of the Theory of Syntax*, The MIT Press (1965)

Barbara Joe Beckman: *Underlying Word Order—German as a VSO Language*

Peter D. Lang 1980

John Worthen: *D. H. Lawrence and the Idea of the Novel*

井上 義夫

D. H. ローレンスの文学と思想に関する研究が、現在に於るような隆盛を見るのは、彼の死後30年余りを経た1960年代以降のことである。それ以前の時期の批評家、研究者は、ローレンスがまっとうな文学者であることを広く社会に対して立証しなければならないという、他の偉大な作家の場合とは異なる課題を第一の課題として負わねばならなかつ